

## 阿弥陀堂建立の記

伊藤 丈

享保八年（一七二三）四月廿三日、五代將軍綱吉の息女竹姫が祐天寺に参詣、かねて心願の阿弥陀如来尊像を造立したい旨を祐海に伝えた。祐海はその折、「本尊ご造像のうへは、堂をもご建立遊ばすよう」

と進言したことで、同年五月十三日、竹姫のお付き、おとみとふじ恵を通して、文にて次のように寄せられた。

「阿弥陀如来の事、御長ヶ三尺の座像、お堂は宜しき様にご建立、右阿弥陀如来の尊像は、神田の仏師小堀浄運へ申しつけよ」

これを受けて祐海は、ただちに建立に必要な材料と、大工や人足などの手配を済まし、九月四日、その許可願いを寺社御月番土井伊豫守に提出した。即刻、明後日六日、土井宅へ祐海がこられたしとの返書が届き、その日、祐海が出向くと、阿弥陀堂建立の許可がついにおりたのである。

十一月十二日、金色の阿弥陀如来尊像は完成した。小堀浄運はすぐさまこのこ

とを祐天寺に伝え、同日、像は納められる。翌十三日から十五日まで、本堂北の方の御前の間において、屏風囲いをして尊容を安置、開眼供養を営む。十六日には、本尊をお迎えとして、竹姫からの使者、大奥御広敷番深川平兵衛ほか数名が来寺、竹姫の文と祝いの言葉を言上。十九日、大奥御年寄中から、供養のもくろく、御女中方からは銀包などのお供えがあつた。

十二月十九日、下目黒棟梁大工小林庄右衛門、地割濱田仁兵衛、肝煎甚右衛門三人へ、三間四面の阿弥陀堂築造を命じ、同廿四日手斧初めの儀式を執り行い、祐天寺僧衆が唱和する護念経と念仏廻向により、滞りなく地鎮祭を奉修。

享保九年正月十五日を期として、阿弥陀堂建造が開始されたのである。

三月廿八日、柱立。棟梁小林庄右衛門はじめ、地割仁兵衛と肝煎甚右衛門ほか控える中、本寺僧衆が安全祈願の四誓偈と念仏廻向を供養する。

四月十三日、阿弥陀堂上棟。五月十二

日、ことごとく阿弥陀堂の建立成就につき、入仏供養法事式が修行され、本堂にて四誓偈、念仏廻向ののち、大玄関から阿弥陀堂へ、僧衆は二列に並んで、酒水を持つ僧一人、楽僧九人のほか、大工三人と仏師小堀浄運、幡二本、天蓋をそれぞれ捧げ持つ僧六人、香衣の僧四人、導師祐海、侍者祐益、祐達、役僧霊林、寛



## 阿弥陀堂建立の記

伊藤 丈

雄、祐弁、祐門、祐義、祐的、義潭和尚、梵潮和尚、檀的和尚、茶の間役の僧三人、詰衆十三僧、その他取持道俗が行列の後につづき、参列者七十五人余が阿弥陀堂の前へと進み、祐海と侍者そして楽僧と役僧数人が入堂、入仏供養法事式が厳修された。

七月十三日、大奥の於連が阿弥陀堂の扁額を寄進、祐海が筆を執る。